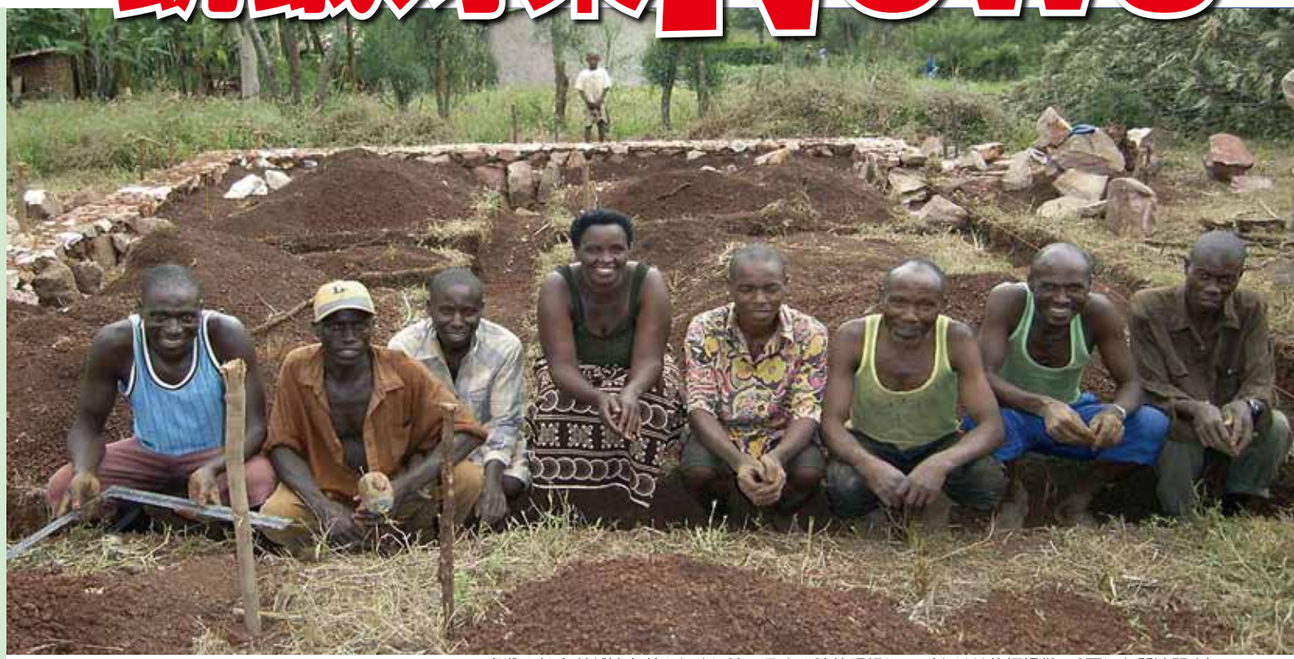
飢餓対策 NEWS　第 269 号　発行日 2012 年 11 月 20 日（毎月 20 日発行）定価 15 円

日本国際飢餓対策機構（Japan International Food for the Hungry：略して JIFH）は、イエス・キリストの精神に基づいて活動する非営利の民間海外協力団体 (NGO) です。1981 年に誕生して以来、世界の貧困・飢餓問題の解決のために、自立開発協力、教育支援、緊急援助、人財育成、海外スタッフ派遣、飢餓啓発などに活動を広げてきました。現在は、国際飢餓対策機構連合（Food for the Hungry International Federation）の一員として、18 ヶ国 60 の協力団体とともに、アジア、アフリカ、中南米の開発途上国で、現地パートナーと協力しあって、「こころとからだの飢餓」に応える働きをしています。

JIFH 日本国際飢餓対策機構　2012 No.269　12

飢餓対策News



虐殺の加害者が被害者のために建てる家の建築現場にて（カリサ牧師提供、2頁にも関連記事）

飢餓体験から平和への道

「皆さんには、私が経験したことを絶対に経験してほしくない。それが難民キャンプの生活なのです」

ルワンダで平和と和解の取り組みをしているNGO、REACHの代表であるフィルバート・カリサ牧師は、招かれた小学校の子どもたちに静かに語りかけました。

日本国際飢餓対策機構が世界食料デーのゲストスピーカーとしてお招きし、いくつかの公立、私立学校でもお話ししてもらいました。

「毎日自分の周りで誰かが死んでいきます。キャンプ内では子どもは10人生まれても2人しか生き残れません。あとの8人は5歳になるまでに亡くなるのです。また2日、3日と全く食料が届かず、水以外何も口に入れることができない時が何度もありました。」

カリサ牧師は、ルワンダの隣国ブルンジの難民キャンプで誕生。当時も民族紛争が絶えず、祖父らがルワンダで殺害されたため、両親はそれぞれがキャンプに避難していたのです。18歳までキャンプで暮らした後、国連などの支援を受けて学び、牧師になりました。ルワンダで大虐殺が起こった94年はイギリスに留学中でした。翌年、ルワンダに戻ったカリサ牧師は全てが荒廃し、破壊された風景を見て、祖国のために何かをしなければと決意、聖書が教える赦しと和解の組織「REACH」を設立したのです。

ルワンダで起こった悲劇は20世紀最悪の虐殺でした。ルワンダの人々をフツ族とツチ族に自分たちの統治のために意図的に分けていったのは旧宗主国のベルギーでした。部族で分けたのではなく、階級で分けていったのです。すでに多数派のフツが政権を握っていたにも関わらず、少数派のツチを完全抹殺するために虐殺が起こりました。人間がここまでどうしてできるかというほどの蛮行が行われたのです。

カリサ師は「復讐したい」「大虐殺の時、あなたはここにいなかったではないか」などと言われ、理解を得るのは困難そのものでした。それでも「人々が憎しみ合っていては世代が変わっても同じことが繰り返される。本当の平和を目指すためにはルワンダ人同士の許しと謝罪が必要」と説き続けました。

難民キャンプで生まれ、飢餓状態の中で人々の死を間近で見てきたカリサ牧師の原体験が、ルワンダの平和の取り組みに生きています。日本国際飢餓対策機構は今後もハンガーゼロ・アフリカの一つの大きな取り組みとして、REACHと共にルワンダのみならずその周辺諸国にも平和の取り組みが広がることを期待しながら、協力を続けていきます。

「義の実を結ばせる種は、平和を作る人によって平和のうちに蒔かれます」（聖書）

日本国際飢餓対策機構　常務理事　清家弘久

1 分間に 17 人（うち 12 人が子ども）・1 日に 2 万 5 千人・1 年間では約 1,000 万人が、飢えのために生命を失っています。

クリスマスや新年の贈り物に
フェアトレード・チョコやハンガーゼロ・コーヒーなどをご利用ください!!

当機構の協力企業キングダムビジネスでは、フェアトレード（公正な取引）商品などの販売を通して、飢餓対策を応援しています。年末年始の贈答シーズンにはぜご利用ください。

★ PeopleTree フェアトレード・チョコ
オレンジ、ヘーゼルナッツ、ホワイトクリスピー、ミルクほか全 6 種　各 290 円

★ハンガーゼロ・コーヒー
モカブレンド（原産国　エチオピア、ブラジル、他）　200g 入り、600 円
ココア（同額）もあります。

★ 2013 年 ONE WORLD カレンダー
国際協力カレンダー「地球家族」2013 年版のお申し込みを受付ています。壁掛型と卓上型があります。
壁掛型　縦 54㎝×横 36㎝ 1 部 1,050 円
卓上型　縦 12.5㎝×横 16㎝ 1 部　600 円

お申し込み、お問い合わせは、㈱キングダムビジネスまで。
TEL：072（940）6814
FAX：072（940）6824
https://www.kbwin-win.org
お早めにお求めください。

ハンガーゼロ・サポーター大募集中！

今すぐ▶▶▶ 各種支援のお申し込みができます!!

●まず右の必要事項に記入して、点線の枠部分を切り取りハガキに貼って、下記の大阪事務所宛に郵送、又はこの頁をコピーして、ファクシミリで申し込みください。確認のための必要書類等を送らせていただきます。
お電話でも申し込みできます。各事務所までおかけ下さい。

□ ハンガーゼロ・サポーターとして協力します。
毎月（　　）口　（1口 1,000 円）
□ チャイルド・サポーター（世界里親会）になりたいので説明書（申込書）を送ってください。
□ 海外スタッフ・サポーターとして協力します。
毎月（　　）口　（1口 1,000 円）
□ JIFH（日本国際飢餓対策機構）サポーターとして協力します。
毎月（　　）口　（1口 500 円）
□ 郵便自動引落し申込書を送って下さい。
□ その他の銀行自動引落し申込書を送って下さい。

フリガナ
氏名：　　男・女
〒
フリガナ
住所：
（電話）
▼申込日：　　年　月　日▼

FAX・072-920-2155

ハンガーゼロ・サポーター　2422口。ぜひあなたのお知り合いにもお知らせください。

世界里親会 新パンフ出来ました

世界里親会の新しいパンフレットができました！

世界里親会では、フィリピン、ケニア、ルワンダ、ボリビアで子どもたちを支援してくださるチャイルド・サポーター (里親さん) を募集しています。

バングラデシュ、カンボジア、ウガンダでは継続して支援中です。

里親となって、貧しさゆえに教育が受けられない子どもをサポートすることを通して、開発途上国や世界に目を向けることができます。また手紙のやり取りによって、学校で学び、心身ともに成長していく子どもの姿に励まされることでしょう。あなたの里子が地域のリーダーとして世界を変えていく可能性を信じて。わたしから始める、世界が変わる！ご請求は大阪事務所世界里親会まで。

毎月、飢餓対策ニュースを皆様にお届けするために、ひばり障害者作業所（八尾市）、生活愛、関西地区のボランティアの皆様が発送作業のご協力をして下さっています。

■発行者　岩橋竜介
■発行所　一般財団法人　日本国際飢餓対策機構
いいね 大募集　Webサイトアドレス http://www.jifh.org/　eメールアドレス general@jifh.org　フェイスブック https://www.facebook.com/hungerzero
■募金方法　※各種方法で随時受付中、詳しくは電話やウエブサイトで
身近に便利になりました
●郵便振替　00170-9-68590 ／日本国際飢餓対策機構
●他の金融機関からの自動振替●クレジット、デジタルコンビニ

大　阪　〒581-0032 八尾市弓削町 3-74-1　TEL (072)920-2225　FAX (072)920-2155
東　京　〒101-0062 千代田区神田駿河台2-1 OCC ビル 517 号室　TEL (03)3518-0781　FAX (03)3518-0782
愛　知　〒466-0064 名古屋市昭和区鶴舞 3-8-10 愛知労働文化センター 2F　TEL (052)731-8111　FAX (052)731-8114
広　島　〒730-0036 広島市中区袋町4-8 CLC ブックス 2F　TEL (082)546-9036　FAX (082)546-9037
沖　縄　〒901-0156 那覇市田原3-8-1 ユリ香ハウス 201号　TEL (098)859-4585　FAX (098)859-4540
東　北　〒980-0012 仙台市青葉区錦町1-13-6エマオ2階E　TEL (022)217-4611　FAX (022)217-6651

2012 World Food Day 報告

ハンガーゼロの世界を目指して…平和と飢餓

世界食料デー

■特別講演■　ルワンダ・REACH代表　フィルバート・カリサ牧師

あなたには平和がありますか？

フィルバート・カリサ牧師は、ルワンダ人難民として隣国のブルンジで生まれ、18歳まで難民キャンプで過ごしました。当時難民キャンプでは、子どもの80%が栄養失調で命を落とし、２日間水もなく過ごすこともあったということです。

目の前の現実に愕然…

1995年に初めてルワンダを訪れ、国籍とパスポートを与えられましたが、その時目の当たりにしたのは、100日足らずのうちに100万人以上が殺されるというツチ族に対する大虐殺(1994年)の爪あとでした。1989年には聖公会の牧師となっていましたので、ルワンダ人の間にあった分裂に対して教会が反対もせず、闘う事もせず、正当性を問うこともしなかったということに愕然としました。

そして「自ら和解と平和構築のために働け」という神からの命令を受け、1996年に「REACH」という団体を設立、ルワンダで癒し、和解、平和、持続可能な開発を進める活動を始めたのです。

REACHとは、Reconciliation(和解)、Evangelism(福音)、And（そして）、Christian（クリスチャン）のHealing（癒し）の略です。

被害者は、愛する者を失った苦しみや自らが負った傷に対するトラウマ、孤独、希望がないなどの状況と闘っています。一方加害者は、家族がしてしまったことによって身内としてコミュニティーに受け入れられない悔しさを抱えるなど、双方が痛みをもって苦しんでいます。

心的外傷のリハビリ

REACHでは、加害者と被害者が共に集い、1994年にこの国と自分の身に何が起こったのかを話して辛い体験を分かち合う場を提供する一方、争いの根本的原因をさぐるワークショップ、また自分自身を大切にすること、隣人との和解の原理について学ぶセミナーなどを通して心的外傷のリハビリを行っています。

また、和解後互いの関係を深めるためにグループを作ってもらい、グループが小規模プロジェクトを立案しそれを管理できるスキルを身に付けられるように手助けをして、自転車のタクシーやユーカリ石鹸、バスケット作りなどが始められています。そのほか被害者のために加害者が家を建てたり、スポーツや音楽を通して和解を促進したりするプログラムも行われています。

世界中に広がるように

REACHでは、プログラムに参加した人たちに、自分だけではなく周りの人たちにも変革を進めるように促し、この和解と癒しの活動が世界中に広がることを願っています。

カリサ牧師は最後に、「日本では今紛争が起こっていないから平和であるとはいえません。あなたの心の中には本当の平和がありますか？あなたに平和がなければ隣人にも平和がありません。ルワンダだけではなく、世界の平和のためにもお祈りください」と結ばれました。

（食料デー奈良大会での講演から抜粋）

食料デー奈良大会での講演の様子

●2012年　世界食料デー「一食分募金」へのご協力を感謝いたします。募金は来年３月まで受付いたします。

元海外駐在員　河合朝子ニジェール報告

ここは素晴らしい農地です！

ニジェールはサハラ砂漠の南部に位置し、近年干ばつによる食糧不足に悩まされていることから、当機構からも緊急食糧支援が行われました。

●●●●●●●●●●●●●●●●

今回訪問させていただいた農村地帯では、主食のミレットという穀類の生産をして人々は暮らしていました。ミレットは雨期に育つので、雨が降らないと十分な収穫を得ることができません。干ばつの年には、市場での穀類の値段が高騰し、貧困層の家庭では男性が出稼ぎに出たり物乞いをしたりして収入を得ます。その間、村に残された女性や子どもたちは空腹に耐えなければなりません。

「ここは素晴らしい農地です」と村のリーダーは希望を語る

痩せた土地でミレットの生産のみに頼った暮らしは、頻繁に訪れる干ばつなどの自然災害に対して抵抗力がないようです。訪れたどの村でも、自分たちではどうにもできないので、助けに来てほしいという態度がほとんどでした。

希望を見つめるリーダー

そんな中、ある村を訪れた時、「ここは素晴らしい農地です」という言葉を聞きました。この村には水不足という問題が他の村々と同様にあったのですが、それでもその発言をされたリーダーは、積極的に農業に関する新しい情報を外から得て、村の人々とともに今の状態を改善していこうとしていました。いろいろな果樹を植え、さらに新しい井戸を掘ろうとしているということです。この井戸を利用することで、雨の降らない乾季でも農作物を作れるようになるのです。このリーダーは、村の農地に希望を見ているのだと思わされました。

さらに別の村の、あるお宅をお邪魔した時には、見たことのないたくさんの植物と健康な家畜が整然と管理されている光景を目にしました。家畜はどれも毛並みが良く太っていて、糞尿はきれいに掃除されていました。菜園にはハーブや野菜が植えられ、その中央には木陰ができる大きな木が生えていました。そのお宅で話を伺ったのは、20年もの間難病に苦しむ夫を支えている奥さんです。この家の光景は、まるで奥さんの心の豊かさを表しているようでした。

持てる資源をどう生かすか

ミレットに加え、果樹や野菜など多種多様な作物を植えることで、年間を通した農作物の生産ができ、食や収入源の多様化につながります。さらに、生産活動で出た作物残渣（さ）は有機物として土を肥やす役目も果たしてくれるでしょう。今回出会った二人の取り組みは、工夫次第で自然災害にも屈しない方法があることを示唆しています。

それを可能にするのは、自分の持てる資源を利用してどうにかしようという積極的な態度で動き出す人たちで、そういう人たちが徐々に周りに影響を与え「どうにもできない」と思われそうな環境、地域を変えていくのだと思わされます。

ハンガーゼロの活動は、この様な人たちを励まし、助けを待つのでなく地域全体が自立できるようにお手伝いさせていただくことです。

当機構はハンガーゼロ・アフリカの取り組みの一環として今年7月にニジェールを再訪問。その際に元駐在員でオランダで留学中の河合朝子も現地で合流しました。

●ハンガーゼロ・サポーターのお申し込みは、最終頁の申込み欄又はウエブサイトから。クレジットも利用可能です。

世界里親会は、フィリピン・ルソン島の南西に位置するビコール地域で2013年1月、教育支援活動を始めます

フィリピンの子どもたちに愛のおくりものを！

支援地区の暮らしの現状

●マトノグ地区
主な仕事…ココナッツ栽培（小作農民）
収入…1,700～2,300ペソ（3,500～5,000円）一般フィリピン人の３分の１
住環境…住居はヤシの葉を使う簡易住宅、生活用水は近隣に汲みにいく。
●スラ地区
主な仕事…漁業、渡し船
収入…0～2,000ペソ（0～4,000円）
住環境…住居はヤシの葉を使う簡易住宅、生活用水は近隣に汲みにいく。飲料水は購入する。
※ビコール地域は、フィリピンの貧困レベルでも最も貧しく、中でもマトノグ、スラ地区は特に貧しい。

スラの学校で学ぶ子どもたち

マトノグの地域リーダーとともに、中央に小西小百合

農村 マトノグ 里子数200人

550世帯が暮らすこの地区の主な仕事は、ココナッツ栽培です。ほとんどが小作農家のため収穫の６割は地主のものになります。したがって収入は極めて低く、村の200世帯が貧困家庭、そのうち50世帯は日々の食事にも困る生活をしています。

半分以上の家はヤシの葉などの簡易な造りのため、台風や洪水が発生すると容易に壊れてしまいます。生活用水はバイク等で遠くに汲みに行かなければなりません。トイレはほとんどありません。

この地区には保育所と公立小学校がありますが、高校は1.5㎞離れています。学齢期の子どもおよそ750名のうち、30％程度が、教育費の工面が難しいため通学していません。

マトノグの家族の様子

漁村 スラ 里子数50人

320世帯が暮らすスラの人々の主な仕事は漁業です。６ヵ月にわたる雨期にはほとんど魚が獲れず、雨期以外でも漁獲量によって収入が左右されるので、生活は常に不安定です。240世帯が貧困家庭、そのうち190世帯が日々の食事にも困る生活をしています。

生活用水は周辺の井戸を利用しますが、飲料水は買わなければなりません。トイレ設備のある家はまれで、家庭ごみも穴を掘って埋めており衛生面の改善が必要です。島内の公立小学校には学齢期の子どものほとんどが通学しています。働かなければいけないけれども島内には仕事がないといった、他の選択肢がないという理由で就学率が高いのですが、今ある公的補助が終了すれば教育費の工面が困難になり、通学者の激減が予想されます。高校に行くには近隣の島へ渡る必要があり交通費がかさむため、通学者は73人に留まっています。

このようにマトノグとスラの人々は、厳しい毎日の中で生活が改善されることを強く願っています。人々が貧困の悪循環から抜け出すためには皆さまのご支援が必要です。

ぜひ、チャイルドサポーターとしてご協力をお願いいたします。

チャイルドサポーター新規募集

250人の子どもたちがサポーターを待っています。

現地を訪問して
小西小百合
（海外駐在員）

今年５月下旬、２つの村を訪問しました。

★マトノグの子どもの課題★

「こんにちは！」と手を振ると、たいていの人たちがにこにこと手を振って挨拶をしてくれました。「とても明るい感じの村だなぁ」という印象を受けました。最初に訪問したロドラさんは49歳の元気なお母さん。ご主人は建築現場の日雇い（不定期）が仕事で高校生の娘１人と小学校の娘２人がいます。「この地域の主食は米、豆類、カボチャ。日干し魚も食べるけれど、ジャガイモやキャッサバだけの時も多いの。ご飯に塩だけをかけて食べる日もあるのよ」と話してくれました。この地域では子どもたちの栄養改善が大きな課題の一つです。

また“子どもたちが、生活難のために高校進学を断念したり中退したりして、首都マニラなどの都市へ働きに行ったあと音信不通になった、また数年後に自殺した”など悲しい現実も話してくれました。「子どもたちが十分な教育を受け、自分たちの地域で十分な収入・安定した生活ができるようになりたい！」というのが人々の切実な願いです。

★スラの人々の心の葛藤★

38歳のメイリンさんを訪ねましたが、木の葉の屋根、６畳ほどの一間に11人が暮らしていました。漁師のご主人と７人の子ども、孫１人と彼女の弟が同居しています。20歳の息子の嫁は現在マニラで働いています。上の３人の子どもたちはみな高校１年で中退しました。通学のボート代や昼食費を工面できなかったからです。スラの何人かの人たちに「自分たちの地域で誇れることを３つあげて下さい」という質問をしましたが、ほとんど答えられる人がいなかったことに私自身たいへん驚くと共に、様々なことを考えさせられました。

自分たちの地域に関して、全くと言ってよいほど良い点、誇りとする点を見出せない、漁にしか生活の糧を得る道が見いだせず、子どもを高校まで卒業させることもあきらめざるを得ない、村全体が将来を変えるための具体的な方策を探しあぐねて苦しんでいる…。子どもを含め村人のセルフイメージがとても低いことを感じました。

漁業で生計を立てているスラ

スラの親の願いも、マトノグと同様「子どものより良い将来のために、ぜひ高校を卒業してほしい。健康に過ごし、卒業後には仕事を得てしっかりした家庭を持つようになってほしい」ということです。スラとマトノグに暮らす一人一人が神様から与えられている潜在能力に気づき、それを伸ばし、将来にビジョンと希望をもって歩めるようになるためには、皆さまの愛の支援が必要です。ご協力をよろしくお願いいたします！

●チャイルド・サポーターは、里子一人につき毎月4,000円。ウエブサイトからのお申し込みの場合は、クレジットカードもご利用になれます。資料請求は最終面から。大阪事務所　世界里親会 Tel.072(920)2225

里親のめぐみ
チャイルド・サポーターさんのページ

彼らの未来の一端を担わせていただいていると思うとワクワクします

佐々木真喜子さん
（奈良県香芝市）

現在の里子ムランディ君

まず、私たち家族に今日まで里子支援をさせてくださっている神様に 感謝と賛美をいたします。

初めて支援させていただいたのはかれこれ15年前になります。この間に３人のかわいい里子ちゃんに出会うことができました。

最初に出会った里子ちゃんはフィリピンに住む少女でした。主人が2000年にニューセンチュリー教会で行われたオープン記念式典に伺ったとき、その少女と教会から熱い歓迎を受けたことは楽しい思い出になりました。

次に出会った私たちの里子ちゃんは、やはりフィリピンに住むまだ幼い男の子でした。同い年ということで、次男の喜び様といったら大変なものでした。毎晩寝る前には、彼がお腹を空かせないように祈っていました。またクリスマスには、カードと一緒に「折り紙のお人形も贈りたい！」と張り切って作っていました。少し不気味な（息子よ、ゴメンナサイ！）お人形でしたが、きっと気持ちは伝わったと思います。

ケニアの里子が学んでいるシープケア学校

そして現在は、ケニヤに住む少年の支援をさせていただいています。

楽しい思い出もたくさんありますが、里子ちゃんたちの背景は、厳しいものがありました。複雑な家族構成、社会事情など…。

改めて自分の知っている世界の狭さ、持っている常識の偏りも示された気がします。そんな私の知恵や力では何もできないからこそ、JIFHの働きに賛同させていただけることに感謝を覚えます。なにより、現地に赴いて働いてくださる方、また国内で私たちと子どもたちのコーディネートをしてくださっている方、また私たちのように微力ながらも支援させていただく者、それぞれの働きを神様が用いて下さり喜んでくださっていることにも感謝です。

実はこの15年のうち、数ヵ月だけ支援をお休みせざるを得ない時がありました。しかしまた再開出来た時、「私たちが里子ちゃんを支援している」のではなく、「神様が支援させてくださっている」ことを覚えました。また私たちの支援は、彼らの空腹を満たすためだけでなく、彼らの未来の一端を担わせていただいていると思うと、ワクワクしますが責任も感じます。彼らの心にいつも、いつまでも神様の光があるように祈りで支えていきたいと思っています。

2番目の里子ナルボ君

●チャイルド・サポーターのお申し込み・お問い合わせは、大阪事務所　世界里親会 Tel.072(920)2225（吉本、山田）

東北ボランティア・南條吉輝のウガンダ・ワークキャンプ体験記

南三陸の子どもたちの成長を見守りたい

ナマスンビ村の子どもと遊ぶ南條さん㊨

２年前に僕はJIFHの友だちを通して浜松でウガンダの孤児、「ワトト」のコンサートに行きました。それがきっかけでアフリカのことを初めて知り、すごく衝撃をうけました。それから僕に何が出来るかずっと考えていました。

2011年３月11日、東日本大震災が起きました。その時、僕の体はすぐに動き、去年の４月１日から今までJIFHを通して南三陸町でのボランティア活動を続けています。そんな中、今年の５月末にワトトクワイアが南三陸にきてくれました。

僕は２年ぶりにワトトの子どもたちに会えただけでなく裏方で働く事も出来ました。その時JIFHの清家さんに、アフリカに行きたいなぁ～と言うと、“今度８月にワークキャンプがあるから行こうや”と言っていただきました。

南條さんはプロのミュージシャンでもある

やっと夢が叶いました

ウガンダのナマスンビという村へ行ったのですが、ウガンダ全体がとにかくすごく貧しい国でびっくりしました。でも彼らにとってはこの生活が当たり前なんだと知り、自分が恵まれていることに気付かされました。

一方で、すごくうらやましく思った事がありました。子どもたちは僕たちの持っているものを珍しがったり欲しがったりしましたが、僕からすれば何も邪魔するものが無く、すぐ神様に繋がれる環境をうらやましく思ったのです。

僕たちはたくさんの物に囲まれすぎているなと感じました。

子どもどもたちの目はみんなキラキラしていました。ほんの小さな事でも喜んでくれて感謝してくれて、すごく心が痛くなりました。

東北の10年後を思う

僕は南三陸でこの先どうしていこうか悩んでいました。今回のワークキャンプチームで大阪の私立高校教師と会いました。彼女が20年前からいろんな子どもたちの里親をしていて、子どもたちの成長を心から喜んでいる様子にすごく感動しました。

そして今、南三陸にいる子どもたちの10年後ってどうなっているんだろう、この子たちの10年後を見てみたいなと思いました。10年後、クリスチャンセンターに来ている子どもたちが、地域のリーダーになってこの町を良くしていけるならどんなに素晴らしいことか。僕はこれからも、様々なかたちで、この町の人々の復興の応援させていただきたいと願っています。

●東日本緊急支援募金にご協力を　郵便振替 00170-9-68590 日本国際飢餓対策機構　記入欄に「東北地震」と明記